名　称	説　明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
紡織用具											長井亜弓
製糸と紡績	古代では蚕の繭からつくる生糸を「イト（糸・絲）」と呼び、苧（からむし）や麻から取る糸を「ヲ（苧・麻）」と呼び分けていた。また苧や麻の繊維を細く裂いて繋いで糸にすることを「績（う）む」といった。この伝統を受けて明治の産業界では繭から生糸をつくるのを「製糸」、綿花から綿糸をつくるのを「紡績」と呼び分けた。製糸業と紡績業は近代日本を支えた輸出産業で、〇〇製糸、△△紡績という会社が生まれ、大企業に発展している。同じ糸をつくるのに製糸と紡績の二つの言葉があるのは一見紛らわしいが、日本の歴史や文化を読み解くキーワードなので、次世代に正しく伝えていきたいものだ。（河野通明）										
製糸用具（生糸）											
まゆになべ 繭煮鍋	繭から糸を巻き取る際に繭を煮る鍋。							イトトイナベ			
ざぐり 座繰	繭から生糸を紡ぐ道具。立繰器に対して、座して作業することからの呼称。横についた取っ手を回すと、それに連動する木の歯車によって糸枠が軽く回る仕組みになっている。	ザグリ			サグリ	ザグリ		ザグイ	ザグリ	ツヅミ（大分・下毛郡）	
いとわくだい 糸枠台	紡いだ糸や糊付けした糸を、糸枠（糸繰枠）に巻き取るのに用いる台。牛首（うしくび）ともいう。台木に立てた支柱の上部に腕木がつき出ていて、そこに糸枠を通す。	カセワク				ワクサシ					
いとわく 糸枠	糸繰枠ともいう。撚りをかけ糸を巻く。小枠の糸を大枠にかけて輪にするとカセになる。	イトトリワク		ワク	ワク	イトマキ、イトワク	イトワク、イトマキ	イトマキ	ワク		
あしぶみしきいととりき 足踏式糸取機	ふみどり（踏取）ともいう。枠木を組み立てて火鉢と糸取鍋を据え、ペダル・クランクを組み込んで車と連動させる仕組み。	イトトリキカイ				ダルマ	イトトリキ、イトヒキダルマ				
あげわく 揚枠	生糸を巻き取り、綛をつくるのに用いる大形の木枠。座繰や踏取で巻き取った生糸を揚枠に巻き変えて、保管・運搬しやすい大きな綛にした。			アゲワク			オオワク		クイメー		
製糸用具（紬糸）											
まわたかけ 真綿掛	水中で繭をゆっくり引き伸ばしながら薄くなったところに穴をあけて袋上に広げ、口から裏に返して中をよく洗う。水から出して真綿掛に隅をひっかけ、厚さが均等になるよう引き伸ばす。								ティーシー		
まわたひきだい 真綿引台	真綿から紬糸を紡ぐ道具。結城紬の産地ではツクシという。										
紡績用具（麻糸）											
あさぎりぼうちょう 麻切包丁	麻の根元を切り落とし、葉を払い落とす為の包丁。アサヒキボウチョウともいう。										
あさむしおけ 麻蒸桶	糸を取り出す麻やコウゾを蒸すのにもちいる縦長の大形の桶。竈に据えた水を張った大鍋の上から桶をかぶせて蒸す。					オケ、ムシオケ	アサムシオケ	カジオケ、オイデオケ			
おこぎばし 苧こぎ箸	7、8寸の竹製の箸で、川につけたアラソ（荒麻）を箸ではさみ、強く引いて荒皮（苧屑）をとる。						コキバシ			【麻糸などをこく器】こいばし　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
おひきだい 苧引台	大形の足付きまな板。	オヒキイタ、オヒキダイ				タクリイタ、オタクリイタ、オタクリダイ	ナゼイタ				
おひきがね 苧引鋸	梳櫛状のもので木製。オコギバシを合理化したもので、オヒキダイにのせたアラソをなで、苧屑をとる。オヒキノコ（苧引鋸）ともいう。	オヒキガネ				タクリガネ、オタクリガネ、ガネ	カキボウチョウ				
おひきぶね 苧引槽	中にオヒキダイを入れ、オヒキガネでそ皮をはぎとる。	オブネ、オヒキブネ					×				
おぼけ 苧桶	麻糸を績み貯える入れ物。くり抜き製・曲げ物・竹籠製（麻績み籠（おうみかご）などがある。	オボケ				オンボケ、オウミカゴ	オオケ、オボケ、ウミオケ	オゴケ、オボケ	サスキ	【麻を績んで容れる器】おごけ・おぼけ・おみそ・おもけ・まんばち・おんけ　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
紡績用具（木綿糸）											
わたくりき 綿繰り器	実繰（さねくり）ともいう。綿花を実と綿毛とに分離する用具。座って行う手回し式。	×			ワタクリ		ワタクリキ、ミクリ	サネクリ	ワタハナシ		
わたうちゆみ 綿打ち弓	竹または木にツルを張った弓。弓のツルを木槌で弾いてワタに打ちあて、平らなタタミワタにする。綿弓・唐弓（とうゆみ）ともいう。	×					ワタウチユミ				
しのまき 篠巻	わたを細い竹や萱の茎の棒などに巻いて細長い筒状にしたもの。クダ、シノともいう。糸車を使って糸を引きだす。	クダマキ					アメボウ	クダ	クーラ		

※備考欄にはあなたの地域の呼称を記入してください

名　称	説　明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
機織用具											
つむ 紡錘(車)	独楽のような土製、または木製の円錐台に細長い鉄棒をすげ、その先端を鈎状にしたもの。この鈎に繊維をひっかけて回転をあたえると、繊維は撚りがかかって糸になる。テシロツム（手代紡錘）、テスリツムともいう。	ツム			ツモ	ツモ、ツム、テマワシツモ	ツム		×		
つむぎぐるま 紡ぎ車	絹糸や績んだ麻糸に緒りをかける、綿から糸を紡ぎだす、緯糸を管に巻く、などに用いる。逆L字形に組んだ台の支柱の上に大きな竹製の車を取りつけ、台の反対側につけた紡錘に調べ糸をかけて回す。	イトツムギ、イトグルマ、ツムギワク		クダマキグルマ	クダマキ、ブンブン、イトグリ	ブンブン、ビービー	イトグルマ、イトヨリグルマ	イトグルマ	ヤーマ	つむぎぐるま（紡車）、いとよりぐるま（糸縒車）、いとくりぐるま（糸繰車）など　以上、「日本民俗資料事典」（文化庁文化財保護部監修）	
かせぐるま 綛車	紡いだ糸を綛にする道具。綛枠を回転式にしたもの。	イトトリワク				オオカセ、カセトリ、オオワク	カセクリ	カセトリ			
ふわり 綜割	綛糸をかけて回転させ、ほかの糸繰枠や管に巻き移す。ゴコウ（五光・御光）、ジザイマイワ（自在マイワ）、トンボなどともいう。	カセワク		フワリ	フワリ	ワクトリ	フワリ				
おおくだたて 大管立	整経の際、大管に小分けに巻いた糸を、使う本数分立てておくための台。			ザラベ							
せいけいだい 整経台	経台（へだい）ともいう。織機にかける経糸の長さと本数を整える。	セイケイダイ		ヘダイ	ヘダイ	ヘダイ	ヘダイ				
はた 機	人の体を使って織る原始機に対して、角材を組み立てた機台をもつ地機・高機などの総称。原始機に対して織るのが早い、長尺ものが織れる、高機では高度な織物が織れるなどの利点があり、近世以降に普及した。（河野通明）	ハタシ			ハタゴ					【機】きぬはた・ちゃんこばた・ぬぬばた・はたうぬ・ばたむん・はたもの・ばとぅむぬ・ばと一むぬ　以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【織機】はたご・はたし・はたもの　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
じばた 地機	庶民の間で古代から使われてきた織機で、麻・木綿など植物繊維の糸を布に織った。経糸はチキリに巻いて機台にセットし、織り上がった布は布巻具に巻き取って腰帯で引っ張り、経糸の張力を自在に調整する構造になっている。足縄を引くとマネキと呼ばれるレバーが上がって下糸を引き上げ、隙間に管大杼（くだおおひ）で打ち込んで横糸を通す。機台が低く座位置も低いことから、地ハタゴ、シモバタ、イザリバタなどと呼ばれた。（河野通明）	ジバタ、ジバタオリキ				ハタゴ	ハタ、ジバタ、シモバタ	ジバタ	ジーバタ	【低織機】はたし　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
たかばた 高機	地機に比べて機能の発達した織機で、布巻具が機台にセットされるので腰帯はなくなり、経糸の張力は機台側で調整する。綜絖は2枚あって左右の踏木を交互に踏んで経糸の開閉をした。地機に比べて座位置が高く、また上部が櫓のように聳えることから高機と呼ばれた。古代いらい絹織物用だったが、江戸時代に養蚕が盛んになるにつれ絹織物が地場産業として発達すると、庶民の間に急速に普及した。また地機に比べて織りの速度が速いことから、木綿や麻織物用にも改良され、地域経済を支えた。（河野通明）	タカバタ		ハタアシ	ハタゴ		タカハタ、カンバタ	タカバタ	タカハタ	【高織機】おばたし　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
そうこう 綜絖	経糸を上下に分けて杼道をあけ通す具。竹を削ったものが多いが、糸で作ったものもある。現在は金属製がほとんど。	ソウコウ			ソウコウ		カザリ	アゼ	ソーコー		
あやぼう 綾棒	経糸のもつれを防ぎ、順序を正しくするために、その間に入れる細い竹の棒。綾竹（あやたけ）、綜竹（あぜたけ）ともいう。「織り人は命を落としてもアゼを落とすな」といわれるほど大事、とされる。			アヤボウ	アヤダケ						
はたばり 機針	一定の巾に織り上げるために使用。両端に針を埋め込んだ棒状の道具。			シンシ	シンシ			シン、シンシ			
ひ 杼	梭とも書く。緯糸を巻いた管を入れ、経糸の開いた間を通す具。	ヒ		ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒジチ	【杼】さい・さしこし・さす　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
くだおおひ 管大杼	ふつうの杼は舟形で20 cmほどだが、管大杼は60 cm前後の大型で下端は刃状に薄く削られていて開口した経糸を打ち込むのに使い、中央上部は厚みをもたせて刳り込みをつくり、糸巻きを内蔵する。地機は朝鮮系だが、筬だけで打ち込む韓国型に対して、筬と管大杼を併用するのが日本型の特徴となっている。（河野通明）						ヒ				
おさ 筬	竹の薄片を櫛の歯のように並べ、枠をつけたもの。織物の幅とたて糸を整え、杼（ひ）で打ち込まれたよこ糸を押さえて織り目の密度を決める道具。金属製のものもある。	オサ		オサ	オサ	オサ	オサ	オサ	フドゥチ	【おさ・布を貫く器具】ほどち　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	